

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	住み慣れた地域で、その人らしく家族との関係を保ちながら暮らしていくという理念に基づいて、日々のケアを行なっている。理念が反映されているか話し合う機会が少ない。	運営者である理事長がスウェーデンのグループホームケアに感銘し、少人数の「その人らしく暮らす家」を自ら手掛けた。定期的に開催されるホーム会やカンファレンス、申し送り時に実践しているかどうか確認している。運営の理念が入り口に掲示されており、職員からも一人ひとりの入居前の暮らしを大切にしていることを伺えた。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	散歩へ出掛けた時には、近所の方々と挨拶をし、野菜が届けられることもある。多くのボランティアや小学生との交流も行なっている。自治会協力金を納め地区の行事に出掛け、地域の方々と時間も楽しんでいる。	ホーム所在地が二つの地区に跨っていることから夏祭りなどの行事へのお誘いも多くなってきている。散歩時には野菜や花などを住民から頂くこともあり、お茶をすすめられることもある。開設から5年が経ち、ホームだよりを入居者や家族の了解のもと地区の住民の方に回覧するなど、職員の地道な努力が実を結びつつある。	時間的な余裕ができればホームの持つ人的な資源を活かし、更に地域との交流を深めるために、「救急救命法」や「介護教室」など地域の人々のいざという時に役立つような講習会の開催を期待したい。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	個々の相談者に対して、適切なアドバイスをしている。また、実習生や地域の保健指導員の受け入れも積極的に行なっている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	会議の際、ホームの活動内容などを報告し、出席して下さった方々からの意見や要望をいただき話し合いを行い、一つ一つ積み上げていくようにしている。	入居者家族、地区の区長や民生委員、広域連合職員等が出席し、職員との双方向的な会議が開催されている。開催日時を日曜日や夜間に設定することもあり、出席メンバーにも快く応じていただいている。特に地区代表の方から力強い協力を得ており、ホームと住民との良き架け橋となっていただいている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	管理者は必要に応じて連絡を取り合い、連携を図っている。	広域連合や市の担当部署とは開設以来の良好な関係が続いている。市の介護相談員が毎月1回来訪しており行事に参加していただくなど協力的である。ホーム長は市の画策する「福祉21ビーンズプラン後期5か年計画」策定のための認知症部会にも係っており、ケアマネジャーの会議等を通じて市との協働姿勢をとっている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	手引きを元に、勉強会を行い、身体拘束をしないケアに取り組んでいる。利用者の様子を察知し、さり気なく声を掛け、自由な暮らしを支えている。	身体拘束をしないケアについて職員は正しく理解しており、入居時に家族等にも説明している。現在そのような状態は全くなく、玄関も夜間防犯上の施錠以外は屋間全鍵をかけていない。徘徊傾向のある入居者については見守りや声かけで対応しており、時には気分転換のため車でドライブに出かけることもある。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	高齢者虐待防止法を理解する機会を持ち、勉強会を実施している。		

グループホーム・せせらぎの家・2階

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	ホーム会等で、職員への説明を行なっている。 制度を利用している入居者もいる。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又はや改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約の際、ご家族への説明や個別の相談等を行い、理解や納得を得られるように努めている。 利用者が増加する場合は説明会を設け、必要に応じて個々の相談に乗っている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	国保連からのポスターを貼り、苦情を出しやすいようにしている。 介護相談員の方にも行事に参加して頂き、ご家族の方知って頂いて相談できる場を設けている。	いちご狩りや敬老会、日帰りの温泉旅行等、シーズン毎に家族等が参加する行事を開き、職員と交流する中で意見や要望を聞き取っている。また、特に入居時には一ヶ月程度家族などに来訪いただくようお願いし、職員と入居者、家族等との意思疎通を円滑にするための十分な時間をとっている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	定期的個人面談を実施し、それ以外にも何かあれば、ホーム会で話し合い、管理者、運営者に伝えている。	毎月第一月曜日に全職員が出席しホーム会を開催しており、時には運営者が出席することもある。ユニットの主任と職員との個人面談も定期的であり、運営者である理事長との面談も年に1回実施され、年間目標に対するふり返りの場となり、意見や要望・悩みを聞く機会ともなっている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	運営者は職員の話聴く機会を設けている。 休憩時間はあるが、職員の為の休息場所がない。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	職員の段階に応じて、外部研修を行なっている。 ホーム会で研修の報告をし、資料作成、配布している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	他施設と連絡を取り合っているが、相互訪問等の活動が少ない。		

グループホーム・せせらぎの家・2階

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居の前後、御本人にお会いしたり、お家へ訪問し、御本人の思いやりや不安を理解して関係づくりに努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	初めての相談にも、まず話を聞いている。これまでの家族の苦労や経過など、ゆっくり話を聞き、落ち着いたところで次の相談ができるよう努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人の思いや状況を見極めた上で、可能な限り柔軟な対応を行い、場合によっては他の事業所のサービスにつなげるなどの対応をしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	料理の仕方、生活の知恵など教えていただいている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	本人の変化があるとき、家族とともに御本人を支えていけるようにしている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	馴染みの美容院へ行ったり、友人からの手紙が届いたり年賀状を出したりしている入居者もいる。しかし、関係が遠のいている利用者もいる。	家族は勿論、入居前に住んでいた近所の方の随時の訪問を受ける入居者もいる。ホームの所在地が跨る二つの地区から夏祭りや区民祭りに招待を受け参加したり、散歩の途中に地域の方から花をいただくような良好な関係が築かれつつある。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士の関係がうまくいくように、職員が調整役となって支援している。		

グループホーム・せせらぎの家・2階

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	ここ一年、サービス利用が終了した方がいない。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	特養の順番がきた時に、家族と職員交えて本人の言葉の中から意向をくみとった。他の入居者も日々の言葉や行動から想いをくみ取るようにしている。	入居者の生活暦や家族等からの聞き取り、入居後の日々の心身状態等を把握し、思いや意向を言葉や表情から推し量っている。言語によるコミュニケーションで判断するよりも表情から汲み取るほうが良い場合もあり、各入居者毎にきめ細かく対応している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居時には、情報を得ているが最近、本人からの情報が少なくなってきた。友人や家族からの情報収集が不十分である。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	身心状態を把握して1日の流れの中で、できそうな事やしてもらっている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人の目線に立ったケアプランが出来ている。 モニタリングによってケアプランの変更が柔軟にできていない。	ユニットごとに月1回の入居者別のカンファレンスを数日に分け実施している。職員は一人から二人の入居者を担当しており、計画作成に当り気のついた点を文章化している。パート職員も含め人員体制は厚く、きめ細かい見直しに繋がっている。介護計画も優先順位がつけられており、具体的かつ分かり易い言葉で標記されている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	職員の気づきや利用者の状態変化は個々のチャートに記載し、職員間の情報共有をしているが、記録を活かしきれずにケアプランや実践につながらない時がある。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	通院の送迎や美容院の送迎をしている。		

グループホーム・せせらぎの家・2階

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	訪問理美容、図書館利用、地域の夏祭りや運動会、近くの小学生との交流をしている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	本人、ご家族の希望にそったかかりつけ医になっている。 複数の医療機関と関係性を結んでいる。 必要に応じて受診の付き添いや、ご家族に同行してもらっている。	開設から5年を経ているが、入居前からのかかりつけ医を継続している入居者もいる。法人の理事長が医師でもあるため月1回の往診がある他、ホームには3人の看護師がおり、通院の付添いとして必ず同行している。介護度4以上の方が増えてきているが、状態の変化に合わせたきめ細かい対応が図られている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護職員を配置しており、利用者の健康管理や状態変化に応じた対応をしている。 かかりつけ医の看護師とも連携をとっている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	医療機関へ情報提供し、事業所内での対応可能な段階でなるべく早く退院できるよう、家族も含め話し合いをした。お見舞いにも行くようにした。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	本人や家族の意向をふまえ、医師、職員が連携をとり、安心して納得した最期を迎えられるように随時、意思を確認しながら取り組んでいる。	開設後5年間で、ホームとしての看取りの経験が2度ほどある。その際にも他の入居者の動揺や混乱はなかった。入居時には家族などに重度化した場合等について十分説明がされており、看取りなどの現実に対応した場合にも医師との連携をとっている。状態の変化に合わせ意志を確認しながら見極めている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	全職員が救急救命法の研修を受けている。 入居者急変時のマニュアルを作成し、掲示している。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	利用者とともに昼間、夜間を想定して、避難訓練を行なっている。運営推進会議で協力を呼びかけている。 消防署に協力してもらい、避難経路の確認、消火器の使い方などの訓練を行なっている。	年2回、避難訓練も兼ねた防火訓練が消防署の協力の下実施されている。実際に夜8時から実施しており万全を期している。地区の防災マップも作成・配布されており、地域の一員として地区の防災訓練にも参加している。自治会からの協力も非公式ではあるが得られている。屋内でも防災行政無線が聞ける茅野市防災ラジオも備えている。	

グループホーム・せせらぎの家・2階

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	誇りやプライバシーを損ねることなく、本人の気持ちを大切に考えて、さり気ないケアを行なっている。 個人情報をもらさないよう、秘密保持の徹底をしている。	職員の言葉かけはおだやかで、年長者として敬いながらもおかつ自尊心に配慮した支援が行われている。時節柄、インフルエンザ予防のためのうがいや手洗いの誘導に際しても、トイレに入り行おうとした入居者に洗面台のほうへとさりげなく声がけしていた。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	それぞれの利用者にあった声かけをするだけでなく、意思表示が困難な方には、表情から思いをくみ取ったり、選択しやすい方法にし、なるべく本人が決定できるようにしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	一人ひとりのペースを大切にして、それに合わせた対応を心掛けているが、入浴や行事等、スタッフ間で決定する内容もある。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	馴染みの美容院へ行っている利用者もいる。 服は機能面を優先したものを用意しがちである。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	入居者の意向、希望を取り入れた献立を立てている。 おはぎやいなり寿司など、話し合いながら楽しく作ったりしている。片付けもできる時は手伝ってもらっている。	献立は栄養士の資格のある職員が中心になって全職員で考えている。当初の計画を入居者の意向や希望にそって当日になって変更することもある。状態の変化や重度化に伴い、刻みやミキサー食などの食事形態に変えている。入居者で出来る方は調理や配膳、後片付けなども行っている。茶碗やおわん、湯呑みなどの食器も入居者に合わせ色とりどり用意されている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	利用者の好き嫌いに応じて食事を作っている。食器は個々に使い易いものを用意している。 食事、飲水量を把握し、過不足にならないよう心掛けている。 その人に合った食事形態にしている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないように、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	その人に合ったハブラシや口腔ケア用スポンジを使用している。 夕食後、義歯の洗浄を行なっている。(週2回義歯洗浄剤使用している) できる範囲で自分で磨いてもらっている。		

グループホーム・せせらぎの家・2階

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	紙パンツやパットを使用しながらも排泄チェック表を活用してパターンを把握し、なるべくトイレで排泄できるよう支援している。	自立できている入居者も数名おり、排泄のパターンを把握し、できるだけトイレでの排泄をするよう支援している。状態により、夜間オムツを使用している方もいる。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	飲食物を工夫して、自然排便できるよう心掛けているが、排便促すための運動は不足している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	限られた時間の中で、満足して入浴できるように工夫しているが、一人ひとりのかつての生活習慣に合わせた入浴支援までは出来ていない。	職員の勤務体制は全般に厚く、特に日勤帯はユニット4～5名体制で臨んでいるため、夜間を除き入居者の希望にそった入浴ができている。入居者の重度化がすすんでいるが、今のところ職員一人で十分支援できる。入浴を拒む傾向の方には、時間をおいて声がけを工夫するなど職員全員で対応している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	日中の活動に配慮して、一人ひとりの生活リズムを整えるよう支援している。夕方の入浴や、暖かいミルクを飲用して頂き、安眠できるよう工夫している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬の説明書を個人チャートに入れ、服薬時は本人に手渡し、きちんと服用できているか確認している。処方の変更時は、内容、副作用など連絡ノートに記載し、状態の変化、観察につとめている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	一人ひとりの役割や楽しみごとの把握をし、それぞれの人に合わせて働きかけている。しかし、常に職員がその人の生活を意識した場面づくりが出来ている訳ではない。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	外出を希望する利用者には、希望にそって対応ができている。意思表示がなかったり、重度の方には外出する機会が少ない。	開設当初と比べ全体での外出やドライブは減っているが、シーズン毎にいちご狩りやぶどう狩り、家族との日帰り温泉旅行等で外出している。ふだんは近隣の散歩に出かけたり、ホームの食材の買い物時に入居者と職員が同行し本人の希望の買い物や飲食などを楽しむこともある。読書を趣味としている入居者の方が数名おり、図書館へ借りに出かけている。	

グループホーム・せせらぎの家・2階

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金の管理は職員がしている。 買い物の支払いの時は、お金をお渡しし、支払ってもらえるような状況を作っている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	希望があれば、家族や友人に電話をかけている。 年賀状を出せるように支援している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	設計上、仕方のない所もあるが、テレビの音、室温、湿度など利用者が居心地良く過ごせるようにしている。季節に合わせて絵手紙や七夕飾り、まゆ玉を飾っている。	階段を上がると右手に事務室、左手に厨房がある。ユニットの中央にはソファが置かれ地元紙などを読んだり、テレビをみたりと入居者が自由にくつろげる空間となっている。掘り炬燵のきられた畳敷きの小上がりもあり寒冷地ならではの工夫が見られる。角材を用いた縦格子が居室との間仕切りとなり、ユニット全体の造りも昔ながらの木を直線的に用いたもので、すっきりとした和風の雰囲気となっている。外出時の写真や入居者の作品も飾られており、充実した暮らしぶりが窺えた。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	玄関やスタッフルーム前、ベランダに椅子を置いて、独りになれたり、利用者同士でくつろげるスペースを作っている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	使い慣れたもの、馴染みのもの(タンス・ぬいぐるみ・椅子・TV・寝具・時計など)を持ち込んでいるが、少ない利用者もいる。	各居室には造りつけの収納庫がありベッドの配置もそれぞれに工夫がされている。自作の書道の作品や塗り絵のカレンダー、賞状など各入居者の安らぎに繋がるものが飾られたり置かれている。居室の清掃については出来る入居者にはお願いしたり、職員が手伝い行っている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	トイレの表示をしたり、居室が分かるように工夫しているが、危険防止を優先してしまい、一人ひとりの力を活かせる工夫が足りない。		